

月刊

# いじろのとも

第十一卷

十二月号

ニュースにならない

バスや飛行機の

乗っ取りなら

誰一人として

犠牲者が

でなくても

大ニュースになる

なのに

アフリカでは

毎日

一万人も死んでいるのに

めったに

ニュースにならない

なぜなんだろう

マスコミさん

それでいいのかなあ

生かす力を言え

文部省

生きる力を

言うのなら

生かす力も

言わなけりや

# 人生を考え直して

## みたい人は（八三）

『正法眼蔵』解説（二七）

有時の巻を続けます。

経歴（きょうりやく）といふは、風雨の東西するがごとく学きたるべからず。尽界は不動転なるにあらず、不進退なるにあらず、経歴なり。経歴は、たとへば春のごとし。春に許多般（きよたはん）の様子あり、これを経歴という。外物（げもつ）なきに経歴すると参学すべし。たとへば、春の経歴はかならず春を経歴するなり。経歴は春にあらざれども、春の経歴なるがゆゑに、経歴いま春の時に成道せり。審細（しんさい）に参来参去（さんらいさんこ）すべし。経歴をいふに、境は外頭（げとう）にして、能経歴の法は東にむきて百千世界にゆきすぎ、百千劫をふるとおもふは、仏道の参学、これのみを専一にせざるなり。

いつものように、参考までに玉城康四郎著『現代語訳

正法眼蔵1』（大蔵出版刊）の現代語訳を引用させていただきます。

経めぐる 経歴 ということは、風や雨が東から西へ、西から東へと去来するようなものであると学び来たつてはならない。全世界は、動転しないものはなく、進退しないものもなく、経めぐるのである。

経めぐるということは、たとえば春のようなものである。春は、さまざまな光景を呈している。それを経めぐるというのである。春の外にはべつものはないのに、春は経めぐると学ぶべきである。たとえば、春が経めぐるということは、かならず春を経めぐっているのである。経めぐるということが春ではないけれども、春が経めぐるのであるから、経めぐりがちょうどいま、春の時点で現れているのである。このことをつまびらかに、学び来たり学び去るがよい。

経めぐり 経歴 について誤った考え方は、世界が外側にあつて、経めぐる主体が、たとえば東に向いて多くの世界を通過し、長い時間を経過すると思ふことである。これは仏道を学ぶというところに専念してないためである。

この部分は、「経歴（けょうりやく）」とは何かにつ

いて述べたものです。

経歴につきましては、既に、これまでも、二回出てきました。一つは、八月号で見ましたように、「有時に経歴の功德あり。いはゆる、今日より明日へ経歴す、今日より昨日に経歴す、昨日より今日へ経歴す、今日より今日に経歴す、明日より明日に経歴す。」とありました。また、もう一つは、先月十一月号で、「冥陽に有時なる諸類諸頭、みなわが尽力現成なり、尽力経歴なり。わがいま尽力経歴にあらざれば、一法一物も現成することなし、経歴することなしと参学すべし。」とありました。もう一度、その時の解説をご確認頂ければと思います。

先月号でも述べましたが、結論的に言いますと、経歴は、時間が弁証法的に運動する面を強調して言う時に用いる言葉です。そういう運動を通じて、最終的には統合に達します。それは、自己（未来）と他己（過去）が現在に統合されて、永遠の今が出現するということです。そのためには、尽力がいります。自己を滅したひたすらな修行があるので。道元は、それを只管打坐といいました。

こういうことを頭に置いて読んで頂ければ、ほとんどお分かりだと思えます。ただ、もう一つ気を付けなければならぬのは、これは、どこまでも物理的な時間では

なくて、精神の働きとしての時間であるということです。私が読んでいます全ての解説書が、そのことを間違えて受け取っています。

難しいと思えるところを、順次、見ていきます。

「尽界」は、もう何度も出てきましたが「尽十方界」のことで、宇宙全体をさしています。勿論、それは、精神世界の全体、自己と他己の働きの全てのことです。そうした精神の働きは、常に「動転」し、「進退」し、経歴しているということです。

次に出てきます「経歴は春のごとし」ですが、これは四季の移り変わりとして春のことをいつているわけではありません。どこまでも、前述のように、精神現象としての経歴のことを、春にたとえていることに注意しなければなりません。

「春に許多般（きよたはん）の様子あり」ですが、現代語訳を補足して、「春は、さまざまに春らしい光景を呈するものである」ということになると思います。でも、実際に春のことを言っているわけではありません。春は、雪の降る国では雪が解け、枯れ木だったような木からも芽が一斉に出始め、草は芽吹き、花が咲き、全てのものが活き活きとして来ます。生命の息吹を身近に感じさせてくれます。そのように、経歴もある決まった一定の精

神的・時間的な運動をするということ。

次に「外物（げもつ）なきに経歴すると参学すべし」ということですが、これは、経歴が純粹に精神の内的な運動であることを表しています。精神の外の何ものかによつて経歴するのではないことを、「参禅して学ぶ」べきだ、と言っているのです。

次に「たとへば、春の経歴はかならず春を経歴するなり。経歴は春にあらざれども、春の経歴なるがゆゑに、経歴いま春の時に成道せり。審細（しんさい）に参来参去（さんらいさんこ）すべし」ですが、このように、春をたとへとした経歴でいいますと、春は春という一つの季節現象を出現しますように、春の経歴は、そのように、一定の精神現象を生み出すということ。そしてやがて、「春の時に成道」するということになるのです。

つまり、ある一定の、自己（未来）と他己（過去）との精神的な運動とその統合が、外的な何ものかによつてではなく、純粹に内的な精神の働きとして、春が巡つて来るように勝手に起こつてきて、成道が出現するといっているのです。ここで、成道とは、釈尊がなされたような、悟り・解脱のことです。このことを、間隙なきように（＝審細に）、時間のことですから、参禅して学び来たり、学び去れ、と比喩的に言っているのです。

最後の「経歴をいふに、境は外頭（げとう）にして、能経歴の法は東にむきて百千世界にゆきすぎて、百千万劫をふるとおもふは、仏道の参学、これのみを専一にせざるなり」に進みます。

この部分は、総まとめとして、いままで言ってきたことを、念を押して言っています。

ここで難しいのは、「境は外頭にして、能経歴の法」です。まず「境は外頭にして」ですが、境とは、いま述べました成道の境地のことです。それが「外頭にして」とは、いままで何度も言ってきましたように、「外的なことだとして」ということです。次に「能経歴の法」ですが、「経歴が起こる真実」といったぐらいの意味です。

それを、「東に向いてたくさんの世界を歩き過ぎ、そして、極めて長い時間を過ごすことだと思ふ」のは、仏道での参禅・学習に一心に専念しないからだ、と言っているのです。

くだいようですが、成道できるのは、ひたすら修行している時、春が来るように、「経歴」の内的な精神の働きとして、勝手に起こつて来るのです。自らのほからいで起こるわけではない、ということ。大切なことは、成道することに執らわれないで、ひたすら修行することです。来るときは春のように勝手に来るのです。

## 自作詩短歌等選

### 傲慢な作家の言

ある女流作家が  
書いている

子供は

強情で

利己的で

狡くて普通だ

と

これは

貴女自身の

ことではないの

お偉い作家さん

### 母性・女性性喪失時代

女権論者たちは言う

女だつて

自分の幸せのために

生きて

何が悪い

昔は

子どもと亭主の幸せが

自分の幸せだと

言う女性が

多かつたらうになあ

### 母性の喪失

いまもなお

児童虐待

増えている

どこまで続く

母性の喪失

### 間の文化の意味

日本には

間の文化がある

それは

人間関係の

稠密さを

緩和するもの

### 市場主義の悪弊

市場主義の旋風が

世界を

席卷している

貴金属や穀物や石油

などの物だけでなく

通貨も資本も

全ての財が

投機の対象となり

世界はますます

不安定さを強めている

「かしこい」富者と

そうではない貧者の

二極化が

どんどんと進んでいる

他己を喪失した社会の

行く末やいかん

## 人類滅亡の警告

英国人宇宙物理学者

ホーキング博士は

警告する

人類は今後千年以内に

災害か

地球温暖化のために

滅亡すると

私は

現在の自己社会が

このまま続けば

もっとずっと早い時期に

環境破壊のために

滅亡すると

警告したい

命の尊厳をおかして

動物や植物を

好き勝手に

採取・殺害・消費し

物の尊厳をおかして

遺伝子や

原子力を操作し

何万という

新しい有害化学薬品を

造りだし

物質資源を

際限なく消費して

環境を加速度的に

破壊しているから

ストレスを減らす？

ストレスを

減らしさえすりゃ

精神が

健康に育つと

思ふな大人

**農業を体験させよ**

土に触れ

いのちに触れる

農業を

体験させよ

あらゆる子らに

宥和して生きていこう

マザー・テレサは

言った

日本人はこころが

貧しいと

そして

こころの貧しいことほど

不幸なことはないと

それは

信仰を失ったということ

他己を弱めたということ

日本人よ

互いに宥し合い

互いに和し合って

生きていこう

そして

そうした生き方を

万国万民に

広げていこう

## 自作随筆選

### 修行強要はおせっかい？！

先月号に引き続き、毎日新聞香川県版の「相談室の子どもたち 四国・心のケアの現場から」に載った記事を取り上げたいと思います。

それは、十一月二十五日（土）に、次のような見出しで載りました。「掃除と精神修養」「修行」強要はおせっかい」「ぜいたくな体験 力はぐくむ」です。

話題は、学校での掃除をめぐるものですが、この記事の最後のあたりにある、次の文章がこれを書かれた方の考え方を最もよく表していると思いますので、引用させていただきます。

そもそも子どもは学校に精神修養を求めているのでしょうか。求めてもいないことを強要するのは、おせっかいというものです。まして、これからの「豊かな時代」を生きるには、絶えざる選択を迫られるためにこれまで以上に心の栄養が必要になります。これは精神的にも環境的にもぜいたくな体験をすることではぐくまれるのです。「欠乏の時代」の

知恵である、耐えることや我慢する力をつける修行を押しつけることは、子どもたちが「豊かな時代」を生きる力を養うのを邪魔することになるのです。これを読まれて、皆さんはどんな印象を持たれたでしょうか。正直いって、私は、またまた、びっくりしました。私が、常々言っていることの、ほとんど正反対のことが書かれているからです。

この方は、教育を何だと考えておられるのでしょうか。私は、教育は、その社会が人間として望ましいと考える文化を、次の世代に伝える営みだ、と考えています。ということ、基本的に子どもが求めるから与えるものはありません。子どもに与える文化は、大人の側で用意すべきものです。そこには、必ず統制が伴います。それは、この記事の筆者の言葉で言えば、ある種の強制だと言えます。そういう意味では教育は、まさに「おせっかい」な働きかけだと言えるのです。

この方の考え方の基礎には、人間は、子どもが望むままに、自然に、かつ、自由にやっていければ、勝手に望ましい人間になる、というような思想があるのではないのでしょうか。

おそらく、この考え方は、ルソーやペスタロッチにその始源があるのだと思いますが、私に言わせれば全くの

誤りです。

確かに子どもには、したいことを十分やらせる必要がありませんが、しかし、それだけでは、自己肥大に陥った人間を育てるだけです。自己と他己のバランスのとれた、人間として望ましいように育てるには、したいことをやらせるだけではだめなのです。かならず、自分が我慢して、あるいは耐えて行うことが必要なのです。

それは、欧米流に言いますと、義務ということになります。しかし、日本古来の文化では、人々をそこを通わせ合せて、義務だと言わなくても、人がそうして欲しがっているから、そうするのです。

その基礎には、他者のために何かをしてあげたいという愛があります、あるいは、愛が必要なのです。現在のうちに、それを欠く時、子どもへの管理・統制は、いらぬおせっかいとなり、強制となってくるのです。もっとも言いますと、愛のない管理・統制は、常に行き過ぎて虐待へと発展する危険を伴っているのです。

次に、気になりますのは「心の栄養をつけるには、精神的にも環境的にもぜいたくな体験が必要である」とする点です。

心の栄養がどんなものなのか、定義がありませんので、はつきりは分かりませんが、心の頑健（がんけん）さで

はないかと推測されます。

私に言わせれば、心を頑健にするには、ぜいたくな体験は、必要ありません。それは、かえって心を脆弱（ぜいじやく）にします。少しのストレスでも耐えることができなくしてしまうのです。現在の子どもたちは、すぐ「キレル」と言われていますが、その原因は、日本が経済的に豊かになって、ぜいたくに育ったからなのです。たいていの欲望が満たされて、ほとんど不自由を体験しないからなのです。

心を頑健にするには、この方が、「生きる力を養うのを邪魔する」ものだと言っておられます、「耐えることや我慢する力をつける修行」がいろいろあります。

人間は、自分が幸せになるにも、あるいは他者（連れ合いや子どもや親）を幸せにするにも、自分をコントロールする（制する）ことが必要不可欠なのです。

そのためには、耐えたり、我慢したりしなければなりません。仏教では、六波羅蜜として 布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧がありますが、この中には、まさに耐えることなのです。積尊も、この忍辱の徳目を養うことが最も難しいとおっしゃっています。いま、子どもたち、いや大人たちが、すぐ「キレル」のは、この徳目が無くなってしまったからなのです。

## 釈尊のことば（九六）

法句經解説

（三一七）恐れなくてもよいことに恐れをいただき、恐れねばならぬことに恐れをいだかない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところ（＝地獄）におもむく。

さて、この偈は何を言っているのでしょうか。民主主義にならされた私たちには、何のことか分からないのではないのでしょうか。実際に、「自分」が恐ろしいことが、恐れをいだかなければならないことであって、自分にとって、それ以外に基準はない、と思われるのではないのでしょうか。

民主主義では、絶対な基準は存在しませんから、相対な者にとつては、それぞれに恐れを抱くものが異なってくることになって、自分が実際に恐ろしいことが、恐れねばならないことになってくるのです。

例えば、国際間でも、アメリカにとつて、食料危機は恐れねばならないような、たいした問題とは思えません。日本では、もっとも恐れねばならない問題となると言えます。また、輸出入の問題も、互いに利害が対立し

ていて、恐れねばならない問題が異なると思っています。ですから、ここでいっていることは、絶対な基準に ついてのことです。

例えば、仏教でいう五戒（不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不飲酒）は絶対な基準ですが、これを犯すことは、人間としてももっとも恐れなければならぬことです。なのに、現代の日本では、多くの人（特に若者）が、平気でこうした戒律を犯し、ほとんど恐れをいだかなくてもよいことになっています。ということは、日本人は、ここでいう「悪いところ（＝地獄）におもむく」ということになります。

つまり、この偈がいう通り、恐れなくてもよい、例えば、自分の目先の損失ばかりを恐れたり、人が愛や承認や支持をくれなくなることをばかりを恐れ、恐れなくてはならない五戒のような戒律を犯すことを恐れないわけですから、おそらく、近い将来、日本全体が、この世で地獄をみることになるのではないのでしょうか。

これは、五戒についてだけではありません。六波羅蜜（布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧）についても言えます。たとえば、この中の 布施ですが、いまの日本人にはほとんどこの徳目は、意味を消失してしまっています。その他についても同じです。

(三一八) 避けねばならぬことを避けなくてもよい  
と思ひ、避けてはならぬ(＝必ず為さねばならぬ)  
ことを避けてもよいと考える人々は、邪な見解  
をいだいて、悪いところ(＝地獄)におもむく。

この偈も、この前の偈と同じように、民主主義社会で  
は通用しないものとなっています。自分にとって避けね  
ばならぬことは、どこまでいっても避けねばならないわ  
けで、その基準が自分の中で、矛盾することはありえま  
せん。つまり、前の偈と同様に、相対なものにとって、  
避けてはならぬ(＝必ずなさねばならぬ)ことは、人  
ごとに異なるのです。

ですから、避けねばならぬことを避けなくてもよいと  
思ひ、避けてはならぬ(＝必ず為さねばならぬ)こと  
を避けてもよいと考える」といったことは、絶対に起こ  
らないのです。

それは、ある人にとって、あるいはある国にとって、  
避けねばならないことは、別の人や国には、避けなくて  
もよいことになる。もっと言えば、逆に歓迎すべきこと  
にさえなるのです。

たとえば、国際貿易のことを考えてみれば、このこと

は、明らかです。ある国にとって自国の製品を高く売る  
ことは、大切なことですが、相手国にとっては、それは、  
避けねばならぬこととなります。こうしたことは、個人  
間についても同様です。

私は、かつて次のような詩を作り、『ここらのとも』  
にも載せたことがあります。ご記憶の方もあるか  
もしれません。再載しておきます。

#### 「人間の業の深さ」

多くの人は／行つてはならないことを行い(不殺生・  
不偷盗・不邪淫)／行わなければならぬことを行わな  
い／／言つてはならないことを言い(不妄語・不綺語・  
不悪口・不両舌)／言わなければならぬことを言わな  
い／／思つてはならないことを思ひ(不慳貪・不瞋恚・  
不邪見)／思わなければならぬことを思わぬ／／人  
の業のなんと深いことよ／／ヨーガをしよう／そして業  
から救われよう

この偈の真に言わんとするところは、たとえば、不邪  
淫戒はいま日本、否、世界中で守られていませんが、し  
かしそれは、避けねばならぬことです。それなのに、そ  
れをフリーセックスということばが表すように、避けな

くてもよいと考えています。また、お布施は必ずなさなければならぬことなのですが、いまの日本では、それは、避けてもよいと考えています。

(三一九) 遠ざけるべきこと(「罪」を遠ざけるべきである)と知り、遠ざけてはならぬ(「必ず為さねばならぬ」)ことを遠ざけてはならぬと考える人々は、正しい見解をいだいて、善いところ(「天上」)におもむく。

この偈の前の三つ(三一六、三一八)に出てきました、こうこうすれば、「悪いところ(「地獄」)におもむく」という論法の、裏返しになっています。

繰り返しになりますが、現代の民主主義では、あらゆる価値が相対化しています。これは絶対になさなければならぬという価値はありませんし、これは絶対になさなければならぬという価値もありません。

そうした絶対な価値を示したのは、欧米では、憲法をはじめ、あらゆる法律を超越した、絶対な『聖書』でした。しかし、民主主義が進展するにつれて、それさえもが輝き(規範性)を失い、ただの書物(読み物)に成り下がってきています。それは、例えば、かつて不倫問題

が起きたとき、アメリカ大統領が『聖書』に宣誓して嘘をついたのを見て、明らかです。もはや『聖書』も相対な価値に引き下ろされています。

日本に目をやりますと、日本には仏教や神道や儒教が人々の絶対な価値基準となつて来ましたが、現代では、その全てを失い、人々のよるべとなるべき絶対な基準はどこにもありません。日本ではまさに、人々の行動基準は、資本主義の論理である「利益と選好の極大化」だけになつてしまつていのです。

マザー・テレサが、最後に日本を訪れたとき「日本にも貧困がある。それは、ここらの貧困だ。」と言いましたが、そのここらの貧困は、私たちが、世界のトップランナーになつて、全ての価値を相対化してしまつていことに起因しています。

いま、日本、いな、欧米の先進諸国は、全てを相対化する民主主義・資本主義を抑え、絶対な価値(四聖)によつて示されている(を尊重する思想を取り戻さなければなりません。そうしないと、世界は貧しい者と富んだ者との差がますます広がり、不安定になつて行きます。そうなりますと、核爆弾が存在する今、世界は滅亡へと突進していくことになるでしょう。これが、私たちが最も緊急に「為さねばならないこと」と言えるのです。

後記

一、暖かい日が続いていましたが、やっと冬らしくなつて来ました。お風邪など、ひかれませぬように。

二、この世では、さまざまなきこりが起ります。得たものは失われ、出会ったものは別れ、生まれたものは死んでいく、といった具合で、自分の自由にならないことが、いくらでも起ります。釈尊はそれを四苦八苦と言われました。こうしたとき、大切なことは、自由にならないものに執着しないことです。執着しなければならぬのは、自分のこころを磨くことと、ひとのために尽くすことだけです。それは、釈尊のことばで言いますと、自分のこころを耕し、ひとのこころを耕すことともいえますし、自灯明・法灯明にも通じます。

三、このところ、経済の本を読んでいます。先日、古本屋で、内橋克人という人の書いた『経済学は誰のためにあるのか』（岩波書店刊）という本を見つけ、買ってきて読みました。『世界』に連載された九人の経済学者との対談を集めたものようです。

四、何れも、自由競争、市場主義、グローバル化、インなどへ疑問をもった人々たちです。私も、これまで、民主主義や資本主義への根本的な疑問を表明してきましたが、同じ問題意識をもった人が結構いることが分かりま

した。でも、それを解決する方策はいずれも、小手先のもので、人間性への洞察に基づく哲学に裏付けられたものは、一つもありませんでした。

五、私の理論を分かってもらうには、経済について発言するのが、早道なのかなあ、と思ったりしています。なにせ、経済は誰にとっても切実で、無関心ではおられないからです。

六、「釈尊のことば」の解説でも書きましたが、このままアメリカ（をはじめ先進国）の自己主張が続きますと、貧富の差は国の内外を問わず、拡大していきます。それが悪であることは、私には明白なのですが。

月刊 こころのとも 第十一巻 十二月号 （通巻 一三二二号）	平成十二年十二月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（ひよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

